

短期集中C型のツボ

みんなで考えよう well-being ④

TRAPE 代表 CWD / 作業療法士 鎌田 大啓 ともひろ

元の日常を取り戻す 新しい短期集中サービス

情です。

そこで我々は2018年に大阪府寝屋川市で、総合事業のモデル事業を行いました。これは要支援認定の人が短期集中通所サービスを活用することで、「その方らしい元の日常を取り戻すことができるのか」を検証するため、事業運営チームと調査研究チームが共同でプロジェクトを実施するものでした。

成果を出すために必要なアプローチの5大要素

機構からは「短期集中サービスを利用することで、要支援者の介護保険サービスからの卒業に有効であること」をRCT(ランダム化比較試験)で明らかにすることができました。

私たち「TRAPE」は事業運営チームとして、新しい短期集中サービスの提供内容デザイン・専門職育成(実務指導・教育研修)・事業所運営・プラン作成支援・検討委員会運営・関係者意見調整などを行いました。

また、行政・地域包括支援センター・居宅介護支援事業所・介護事業所・リハ団体・管理栄養士や歯科衛生士など多職種の協力もいただきました。

研究チームである医療経済研究

「元の日常」とは利用者ごとに違い、取り戻すためには本人の自信・欲求が重要です。人は感情の生き物なのでモチベーションが何よりも重要なのです。

そこで徹底的に利用者個人の「③ストレングス(強み)」や「④アセット(環境面の強み)」を本人と一緒に探し、共有し、解釈を深め、新たな社会参加に活用する伴走を専門職の重要な役割にしました。1職種だけでなく多職種の視点・考えを常に交えて、可能性と向き合い、ブラッシュアップすること、つまり「⑤チーム」で取り組む意識がとても重要なのです。

TRAPEがこの事業を、どのようなデザインで行ったのか、その要諦をお伝えします。

まず、重要視したことは、主役は利用者という「①パーソンセンタード」の視点です。次に、要支援状態にある人も地域、つまり「②コミュニティ」で社会生活をしているが、何かの要因で以前の日常における役割などを喪失しているということ。このような人々に「短期集中サービスが提供すべき価値は何か?」について市職員と対話を重ねて「元の日常に戻る」というスローガンを掲げました。

環境の中で、セルフマネジメントを身につけながら、一つひとつ自信・社会的スキル・可能性を取り戻すことにあります。

つまり、元の日常を取り戻す大いなるプロセスなのです。具体的な糸口を手繰るのは至ってシンプルです。「本人に聴く」のです。

専門職が専門性や正論を最初から誇示するのはNGです。しかし、本人も最初から全て自分のことが分かって、表現できるわけではないので、

現でできるわけではないので、

現でできるわけではないので、

寝屋川市では短期集中サービスにおいてリハビリ専門職や介護職が徹底的に対話を重視した取り組みを行い、そのための教育も繰り返し行いました。利用者の何気ない日常での出来事や行動について一緒に向き合い、その中で利用者が自分のストレングスや自分のまわりのアセットなどに改めて気づく体験を提供し、生活者としてのモチベーションが向上し、自ら社会とのつながりの中で自分らしい役割

を手にすることになるきっかけづくりを行うのです。このようなウェルビーイングな日常をデザインする対話を軸にしたアプローチを実施するためには今までの専門性の延長線上でなく、ウェルビーイングな日常をデザインする新しい

い教育(経験学習)が必要なのです。次回は今回の事業デザインの核である「対話」について、さらに具体的に解説していきたいと思えます。

Person centered approach

パーソン センタード アプローチ

- 常に利用者の立場からStoryと向き合う

Community based approach

コミュニティ ベースド アプローチ

- 利用者を社会とのつながりの中での存在と考える

Strength based approach

ストレングス ベースド アプローチ

- 利用者の強み、才能に目を向ける

Asset based approach

アセット ベースド アプローチ

- 利用者の環境因子の強みに目を向ける

Team based approach

チーム ベースド アプローチ

- 利用者の元の日常というStoryを再度手にするために集まったメンバーの協働

